

旭川市

井上靖記念館報

第4号

協賛：井上靖記念文化財団



資料本「井上靖と旭川」発行

井上靖は、一九九〇（平成二）年九月に旭川市開基一〇〇年記念式典と井上靖文学碑の除幕式に出席のため旭川市を訪れ、『現在の私があるのは、母が旭川で私を産んでくれたおかげです』とコメントして、約十年ぶりに訪れた生まれ故郷に深い愛情を示しています。

文学碑について、『重厚感があるとともに、わん曲した面が温かい感じがして非常に良い印象を持った』と満足そうに話しております。そして、旭川についても、『私は北方が大好き。北の人々には何かを切り開こうとする“詩精神”にあふれている。旭川の命もまさにここにある。この土地に生まれていなければ、全く違う人生を送っていたかもしれない』と生誕地への思いを強く語っています。そこで、この度、井上靖の作品の中から、旭川が登場する作品を抜き出した一冊の資料本を作成しました。



この本は、当館の運営等にご協力をいただいているボランティア団体「井上靖ナナカマドの会」会長であります松田忠男氏の寄贈によるものです。井上靖の文学に触れる機会を多くつくることをねらいに、旭川市内の小・中学校及び高等



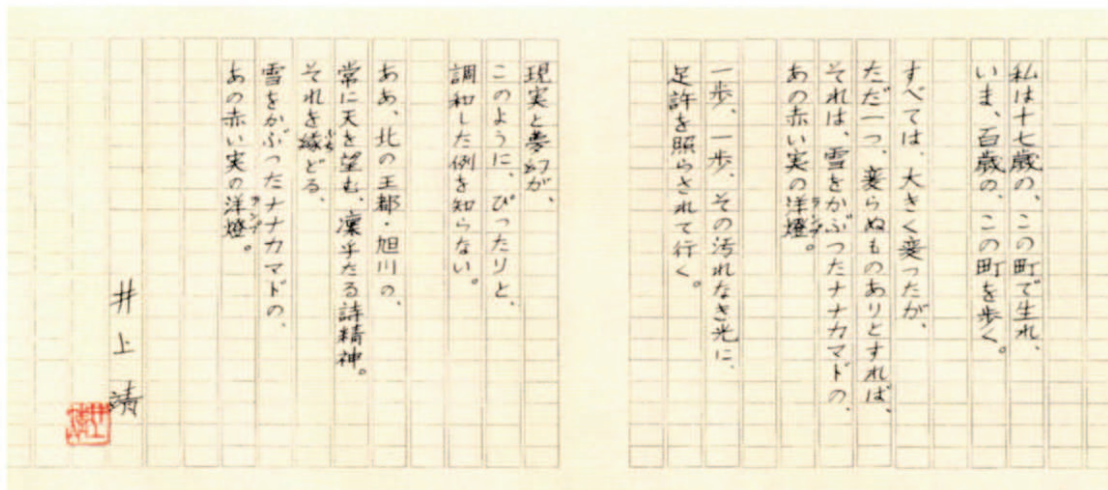
井上靖文学碑前のご夫妻（1990年9月）

等学校等に配布し、多くの方々に活用いただきたいと思っております。

（この本の構成）

- ・ 写真でふり返る井上靖
- ・ 出生地への思いをつづつて
- ・ 井上靖の主な作品
- ・ 井上靖の主な受賞歴
- ・ 旭川市井上靖記念館
- ・ 井上靖略年譜

碑文の自筆原稿



井上靖の業績

井上靖記念館を訪れた人から、

『井上靖記念館がどうして旭川にあるのですか？』

『静岡県でなく、旭川で生まれたことが初めてわかった。』

という声をよく耳にします。井上靖の生誕地が、旭川であるということを知らない地元の若い人たちが増えてきています。

そこで、井上靖と旭川の関係や多くの業績等について、今一度認識していただくため、その概略を紹介いたします。

戦後を代表する国民的作家で、詩人・美術評論家でもある靖は、一九〇七（明四〇）年五月六日、当時、旭川に置かれていた第七師団の軍医の子として旭川で出生しています。

そして、約一年後、父が朝鮮半島への動員で旭川を離れたことにより、母の郷里である伊豆湯ヶ島へ移ります。三才の時、両親のもとを離れ、養祖母（か）の家に預けられ、土蔵で十年間の共同生活を送ります。その様子は「しろばんば」や「幼き日のこと」などの自伝風小説に描かれています。

靖は金沢の第四高等学校を卒業し、その後、一九三二（昭七）年に京都帝国大学に入学します。四高・京大時代は、詩作活動や懸賞作品に応募するなど創作活動を意欲的に行っています。特に四高時代に詩人・大村正次氏（後に旭川東高教

諭（昭二一〜三五年）、同校の逍遙歌の作詞者でもある）の詩誌「日本海詩人」に一九二九（昭四）年作品を発表しています。

その時のことを「青春放浪」の中で『自分が書いたもので、活字にしたのは、これが初めてであった』と述べています。以後、大村氏との交流を続け、靖が一九五五（昭三〇）年講演で旭川を訪れた時、大村氏と再会しています。（記念館に大村氏が井上靖に宛てた自筆の手紙やはがきを展示しており、交流の深さが感じられます。）

京大時代には詩誌「焰」の主宰者福田正夫氏のもとの詩作活動をするかわら、友人と同人雑誌「聖餐」を創刊しています。



聖餐の書籍

また、一九三一（昭六）〜一九三四（昭九）年に澤木信乃、冬木荒之介、岩嵯京丸等のペンネームで数多くの懸賞小説に応募、後に、このころの作品が未発表作品として二十二編余り発見されています。一九三五（昭一〇）年、京大四年生の時にふみ夫と結婚。翌年、京大を卒業。この年、「流転」で第一回千葉亀雄賞を受賞し、これが縁で大阪毎日新聞社に勤めることになりました。

一九四九（昭二四）年、四十二歳の時「猟銃」が多くの人に認められ、翌年「闘牛」で第二十二回芥川賞を受賞します。靖の創作意欲は、旺盛で「猟銃」発表

から、五年間に執筆した小説は、長短合わせて一三〇編に及んでいます。

一九五五（昭三〇）年前後には、当時全盛期を迎えた新聞小説を手がけ、「氷壁」「あした来る人」「幼き日のこと」など、執筆は二十七編を数え、新聞小説家としての地位を確立し、新聞小説の名手と言われました。

また、「おろしや国酔夢譚」など多くの歴史小説をはじめ、中国を舞台にした「蒼き狼」「敦煌」などを発表します。その後は、シルクロードなど西域のエッセイを中心とし、中国や中央アジア等の旅行は四〇数回に及んでいます。

靖の作風として詩精神が小説の母胎であったことはすでに定説となっており、「猟銃」「漆胡樽」「比良のシャクナゲ」等があげられます。靖の詩は散文詩が多く、それらは四高・京大時代を出発点としており、初期詩篇集「春を呼ぶな」や「北国」「地中海」「遠征路」など八詩集に収められています。

靖の作品は、映画三十九本、舞台二十六本、ラジオ・テレビドラマ三十五本と一人の作家の作品がこのように数多く映画・舞台化された例は極めて稀です。

また、翻訳本は「闘牛」「敦煌」「孔子」など七十六編が英語、仏語、中国語、韓国語、ロシア語等十九か国に、なかでも「猟銃」は十四か国語に翻訳され世界中で読まれています。

靖の文学活動は多くの人に認められ、数多くの文学賞等を受賞しておりますが一九七六（昭五一）年には文化勲章を受

章しています。一方、中国と国交のなかった時代から、民間レベルで日中文化交流に情熱を注ぎ、日中国交回復に貢献しています。

靖は、生誕地の旭川に講演会等で四回訪れていますが、その時の生まれ故郷への想いを「出生地の話」「私の自己形成史」「堀口先生のこと」「四季それぞれ」等のエッセイのなかで述べられております。この時の様子を、この度完成した「井上靖と旭川」で紹介しておりますが、最初の頃は「旭川は生まれた土地というだけで……」と書かれていましたが「旭川という町に久闊を叙するような気持ちで……」というように生まれ故郷に対する想いの変化を見ることが出来ます。また、生まれ故郷や生まれた季節に対して、終生、誇りにも似た想いを抱き続けていたことを知ることが出来ます。

一九九〇（平二）年九月、旭川市開基一〇〇年記念式典及び井上靖文学碑除幕式に、ふみ夫人とともに出席されたのが最後の旭川訪問となりました。翌年の一月二十九日、急性肺炎のため八十三年の生涯を終えました。

井上靖が残した輝かしい多くの業績を讃えるとともに、後世に引き継いでいくため、一九九三（平五）年に、旭川市が「旭川市井上靖記念館」と「井上靖通り」を開設しました。

当館ラウンジに掲げている優しい笑みをたたえた井上靖の写真は、訪れる人へ何かを語りかけ、心を癒してくれています。

開館十周年記念特別展

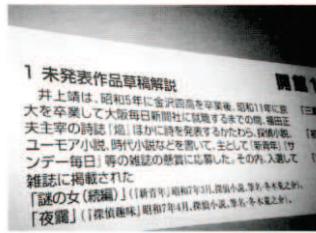
二〇〇三(平一五)年は、展示室を一部改修し、新しく製作した展示ケース六基を用いて、開館十周年記念の特別展示を三回に分けて開催しました。

◆第一弾

【井上靖の未発表作品と新発見書簡】

七月五日(土)〜九月十五日(月)

井上靖の未発表作品は、井上靖全集の編集集中に見えられた二十二点の未発表小説・脚本の草稿のうち、「謎の女」「昇給綺談」「夜霧」など十二点(神奈川近代文学館から借用)を展示しました。



解説のキャプション

年から九年にかけての懸賞応募作品で、冬木荒之介、澤木信乃等様々なペンネームを用いています。

新発見書簡は、平成十一年に三重県熊野市で発見された昭和二十一年から二十五年にかけての、井上靖が新聞記者時代の同僚・竹本辰夫氏に宛てた書簡六通(竹本ゆき子氏から借用)を展示しました。文壇登場以前と「猟銃」「闘牛」が創られた時の心情、戦後の生活の様子がうかがわれ、靖と竹本氏の深い友情と信頼が伝わってくる書簡でした。

◆第二弾

【井上文学の映画・舞台作品を見る】

九月二十二日(月)

十一月三日(月)

井上靖原作の映画は、「流転」「黒い潮」「水壁」「敦煌」など三十九作品に及びますが、一人の作家の作品がこのような数多く映画化されたのは、極めて稀であります。今回は、二十数点のパンフレットやちらし、脚本を展示しました。

また、撮影風景の写真をはじめ、映画や舞台のスチール写真等を展示し、多くの来館者から好評をいただきました。また、特別展示の開催期間中に「サタデーナイトシアター」と題して映画上映会を末広公民館で行いました。

上映作品	上映日
上 映 作 品	上 映 日
猟銃	9/27(土)
ある落日	10/5(日)
敦 煌	10/18(土)
おろしや国酔夢譚	10/26(日)
本覺坊遺文	11/1(土)

昭和三十年代に映画化された「猟銃」「ある落日」の二作品は、映像も古く最近の映画とは違った趣が感じられるものでした。「敦煌」「おろしや国酔夢譚」「本覺坊遺文」は、歴史小説の映画化作品ですが、特に「敦煌」「おろしや国酔夢譚」の二作は外国を舞台にスケールの大きさを感ぜさせるものでした。

◆第三弾

【詩人としての井上靖】

十一月十一日(火)

十二月二十八日(日)



上映会風景

井上靖は、八木義徳氏に「詩を作っている時がいちばん楽しい」と語ったと言われています。この特別展示では、井上靖の沼津中学校時代の友人・藤井寿雄の短詩の影響による「詩への目覚め」として、妙覚寺の詩碑や詩誌「聖餐」「日本海詩人」「日本詩壇」に掲載されている詩や書籍、「詩人との交流」として、安西冬衛・竹中郁・三好達治(測量船)などを展示しました。

また、井上靖に影響を与えた詩人たちの詩「詩から小説へ」として、詩を中核とした「猟銃」「漆胡樽」の詩と小説の関わりや「晩年の詩」として、病床日記などを展示しました。そして、「北国」「地中海」を始めとする八詩集と初期詩篇集「春を呼ぶな」「シルクロード詩集」などの詩書籍を紹介しました。



解説のキャプション

※特別展示の開催に当たり、準備の段階から、当館の相談役(浦城幾世氏、清水節男氏、高野昭氏)をはじめ、曾根義博氏(日大教授)、竹本ゆき子氏(熊野市)や神奈川近代文学館等、多くの皆様のご協力をいただき、心から厚くお礼申し上げます。

自主事業の概要報告

◆文学講演会

内容 井上靖「孔子」と「論語」
とき 平成十五年五月十七日(土)
ところ 井上靖記念館ラウンジ
講師 宮本 勝氏
(北海道教育大学旭川校教授)

講演内容

「論語」は孔子の弟子のメモが中心ですが、孔子の放浪亡命時代についての話から始まります。五つの項目に分けての講演が行われました。

一 はじめに

敬遠、不惑、三省、知新など七つの言葉の説明。

二 「論語」という書物の特徴

子曰で始まる文。「吾已んぬかな」

どの持つ、言葉の意味などの説明。

三 小説『孔子』の梗概

小説『孔子』の箱帯の文に始まり、第五章までの説明。

四 天及び天命について

乱世哲学の根源に「天命」なるものを置き、その「天命」すべてを説明しようとしていることの解説。

五 おわりに

「仁」とは、すべての人間が幸せに生きてゆくための、人間の人間に対する考え方であるなど「仁」の考え方のお話がありました。内容的には、少し難しかったかも知れませんが、井上靖晩年の作品「孔子」と「論語」の関わりについての格調高い講演でした。



◆ロビーコンサート1

とき 平成十五年六月十四日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

演奏者 斉藤 治道氏(ギター)

渡辺 みゆき氏(ピアノ)

曲目 ・スペイン組曲・踊りを讃えて

・映画音楽・ロマンス

・我が心のアランフェス他

新緑が美しい季節に、記念館において今年もコンサートが開かれました。ギターとピアノ独奏に始まり、旭川のこと



ラウンジの中に響きわたる音色は、参加者の皆様を魅了するとともに、心をなごませてくれました。

◆文学散歩

とき 平成十五年七月十二日(土)

見学先 生田原町「オホーツク文学館」

及び文学碑公園等

講師 東 延江氏

(北海道文学館評議員)

井上靖は、北海道に講演等で幾度か訪れ、北見・網走へも足を運んでいます。

今回は、井上靖とオホーツクとの関わり及びオホーツク文学について、生田原町「オホーツク文学館」を訪ねました。そこには、オホーツク圏を舞台にした文学作品や著者等が紹介されており、オホーツクを題材にした作品の多さに参加者も驚いていました。オホーツク文学館の職員

の説明の後、館内の展示室を見学しました。井上靖の「魔の季節」「おろしや国酔夢譚」及び「幼き日のこと」が展示されておりました。また、井上靖の写真と略歴パネル及び山岳作家・瓜生卓造氏

書かれています。「幼き日のこと」、詩「五月のこと」の朗読、ギターとピアノの二重奏と続き最後に懐かしい映画音楽等が演奏され、広い

との対談パネルが展示されていました。

その他、生田原町には文学碑公園があり、原田康子、渡辺淳一、三浦綾子の各氏をはじめ、十九人の著名な作家の文学碑が建てられています。講師の東氏から

碑の説明を聞き、作者や当時の様子に思いをはせた一時でした。文学碑公園の川沿いには全国から希望者を募って建てられた歌碑句碑ロードあり、多くの作品に触れる「文学散歩」でした。



「文学散歩」でした。

◆ロビーコンサート2

とき 平成十五年八月二日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

演奏者 猪狩雅楽旭(いがりうたき)氏

ほか

曲目 ・浦の舟唄・千鳥の曲

・風三章他

日本古来の「箏」「尺八」「三弦」による邦楽演奏会が開かれました。三つの楽器独特の音色は、夢幻の世界へ引き込まれる雰囲気を出していたように思います。詩の朗読では、井上靖の「飛天と千佛」「初冬の大雪山」をお箏のBGMで朗読を行い、詩人としての井上靖の素晴らしさに感動しました。そして、最後に参加者全員で「雪の降

る街を」を台唱。

箏の演奏だけではなく参加者も

溶け合った演奏会は、ほのぼのとした気持ちの中、幕を閉じました。



◆文学講座

「シルクロードと西域物語」

とき ①平成十五年九月六日(土)

②平成十五年十月四日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 岡田 雅勝氏

(元旭川医科大学教授)

講座内容

シルクロードは、東西の交通路として発展し、特に西域地方は、東西の文化及び貿易の重要な中継基地でした。現在の西域は、中国、ウズベクスタン、

キルギス、カザフスタン、アフガニスタンなどがあります。西域地方で暮らす人々の生活や世界の宗教が集まったところでもあります。井上靖の西域の旅は、一九六五(昭四〇)年に始まり、数千キロに及んでいます。「西域物語」の著述のために、司馬遷「史記」、玄奘「大唐西域記」、ヘーデン「彷徨える湖」、本多利明「西域物語」など多くの本を読んでいます。そして、執筆にあたっては、事実をふまえ、事実を徹して書いています。私小説とは異なる作風で、歴史

叙述と紀行をおりませた作品が「西域物語」です。また小説「敦煌」にもふれ、敦煌地域を舞台に争いがあり、敦煌は西夏に滅ぼされま

す。その様子を井上靖は、多くの資料をもとに創作したこの話がありました。

講座では、西域地方の地図を用いて、当時の様子と現況についても話されました。夢とロマンの西域・シルクロードは、「一度訪ねてみたい」そんな気持ちを抱かせるお話でした。



◆読書会

とき ①平成十六年一月三十一日(土) ②平成十六年二月七日(土)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

作品 未発表作品「昇給綺談」

「三原山晴天」
「紅荘の悪魔たち」他

講師 秋岡 康晴氏
(旭川藤高等学校教諭)

内容 二回にわたった読書会で扱った作品は、いずれも大学生時代に懸賞に応募したもので、その後にかかれた作品とは、作風の異なった作品でした。始めに、時代背景や当時の井上靖、詩中心の活動から小説に移っていった作家について、解説があり、開館十周年記念特別展示の未

発表作品の中から、「昇給綺談」とサンデー毎日に掲載された「三原山晴天」を取り上げました。両作品はユーモア小説で、サラリーマンの悲哀をおかしく表現している作品でした。「紅荘の悪魔たち」は探偵小説で、紅荘の住人が次々と謎の死をとげていくという、推理小説風の作品でした。

今までの読書会で取り上げた歴史小説・恋愛小説とは趣の異なるもので、新鮮さを感じられました。



◆企画展

「新聞連載小説にみる井上靖の世界」

とき 平成十六年一月六日(火) 〃

平成十六年三月三十一日(水)

ところ 井上靖記念館

企画展では、井上靖と新聞連載小説との関わりを取り上げました。

戦後、日本の新聞小説は、一九五五(昭三〇)年前後に全盛期を迎えています。作家としてデビューした井上靖は、新進作家としての機運にのって、新聞小説を手がけています。その第一作目の「その人の名は言えない」をはじめ、その後初めて中央紙朝刊に掲載された「あした来る人」により、代表的新聞小説作家、人気作家としての地位を揺るぎないものと

し、第一線作家としての文壇での足場を固めました。新聞連載二十七編(中央紙・地方紙)作品の中から「幼き日のこと」「氷壁」「あした来る人」など十二編の新聞切り抜きや執筆

◆紙芝居「しるばんば」

とき 平成十五年十一月十四日(金)

ところ 井上靖記念館ラウンジ

講師 上森 伸子氏
(旭川おはなしの会代表)

子供たちに、井上靖について少しでも多く理解してもらおうと、当館では、小学生向けの文芸まんがシリーズ「しるばんば」の本をラウンジに置いて、いつでも閲覧できるようにしてあります。

小学校の総合学習の一環として、今回当館職員の手作りの「紙芝居」を実施しました。六十八名の参加者は、井上靖が子どものころ、祖母のさんと土蔵の中で生活した様子などを描いた紙芝居に聞き入っていました。

その後、館内にある生家や土蔵の模型、展示を見て、井上靖について、少し理解できたようでした。

にあたっての作者の言葉・書籍等を展示しました。平山郁夫、生沢朗、上村松篁、小磯良平、舟越保武等が担当した挿絵は、より一層小説を引き立てていました。

特に、「幼き日のこと」は、平山郁夫、上村松篁、加山又造の三人の有名な画家の友情出演によるもので、改めて井上靖の偉大さを知ることができました。

年度別入館者数

年度	人数
平成5年	12,703
平成6年	20,385
平成7年	16,599
平成8年	14,893
平成9年	14,639
平成10年	16,832
平成11年	15,848
平成12年	13,536
平成13年	11,450
平成14年	12,475
平成15年	13,496

(平成5年7月24日開館)

平成15年度の月別入館者数

月	人数
4	596
5	1,214
6	874
7	2,040
8	2,073
9	2,094
10	1,701
11	1,320
12	539
1	333
2	345
3	367
合計	13,496



一年間のあゆみ

- ▽五月十七日
文学講演会
*演題 井上靖「孔子」と「論語」
*講師 宮本 勝氏
- ▽六月七日
喫茶コーナー始まる
- ▽六月十四日
ロビーコンサート1
*ピアノとギター演奏
*斉藤 治道氏・渡辺 みゆき氏
- ▽六月二十四日〜二十九日
展示室改修工事のため臨時休館
- ▽七月五日〜九月十五日
特別展示第一弾
*井上靖の未発表作品と新発見書簡
- ▽七月十二日
文学散歩
*見学先 オホーツク文学館
*講師 東 延江氏
- ▽七月十七日
第一回 井上靖記念館運営協議会
*会場 旭川市彫刻美術館
- ▽七月十九日〜二十日
相談役会議
*会場 東京
- ▽七月二十九日
札幌駐在 中国新総領事来館
- ▽八月二日
ロビーコンサート2
*井上靖の詩の世界と筆とのふれあい
*猪狩 雅楽旭氏

- ▽九月六日〜十月四日
文学講座
*シルクロードと「西域物語」
*講師 岡田 雅勝氏
- ▽九月二十二日〜十一月三日
特別展示第二弾
*井上文学の映画・舞台作品を見る
(上映会別途実施)

- ▽十月二十七日
喫茶コーナー終了
- ▽十一月七日
第二回 井上靖記念館運営協議会
*会場 旭川市彫刻美術館
- ▽十一月十一日〜十二月二十八日
特別展示第三弾
*詩人としての井上靖
*紙芝居「しろばんば」
講師 上森 仲子氏

ご利用マップ



交通のご案内
あさでんバス
旭川駅前発⑤番 (所要時間25分)
1条7丁目発22、80番 (所要時間25分)
いずれも4区1条1丁目下車 (徒歩3分)
タクシー/旭川駅前から1,600円程度

〒070-0091 旭川市4区1条1丁目
Tel. 0166-51-1188 Fax. 0166-52-1740
開館時間/午前9時〜午後5時
休館日/毎週月曜日 (7〜9月は休館日なし)
(月曜日が祝日の場合は翌日) 年末年始
観覧料/無料

平成16年度のご案内

企画展

- ◎井上靖/自筆原稿展
4/1 (木) ~ 6/30 (水)
- ◎「幼き日のこと」特集展
7/1 (木) ~ 9/30 (木)
- ◎「おもしろや国酔夢譚」特集展
10/1 (金) ~ 12/29 (水)
- ◎新聞連載小説特集展
1/5 (水) ~ 3/31 (木)

- ▽一月六日〜三月三十一日
企画展
*新聞連載小説に見る井上靖の世界
読書会
▽一月三十一日・二月七日

事業計画

文学講演会	6月12日(土)
文学散歩	7月10日(土)
しろばんば/紙芝居	夏休み期間中(4回)
ロビーコンサート	8月21日(土)
井上靖の映像の世界	9月中(3回)
第1回文学講座	10月16日(土)
第2回文学講座	11月13日(土)
第1回読書会	1月29日(土)
第2回読書会	2月5日(土)

- *作品 「昇給綺談」「三原山晴天」「紅荘の悪魔たち」など
- *講師 秋岡 康晴氏

職員動静

〈転出〉	館長 清水 蓮雄
	臨時 滝川ひろみ
〈着任〉	館長 荒川 美智
	主任 高橋 忍
	臨時 岡村 美穂

編集後記

▼開館十周年の特別展も好評のうちに終わりました。井上家・曾根先生をはじめ、多くの関係者の方々からご支援をいただき、感謝申し上げます。